

## 英文学系授業における学修成果の可視化について

On visualization of learning outcomes in English literature classes

武藤 哲郎<sup>1</sup>

<sup>1</sup>大妻女子大学短期大学部英文科

Tetsuro Muto<sup>1</sup>

<sup>1</sup>Department of English Language & Literature, Junior College, Otsuma Women's University

12 Sanban-cho, Chiyoda-ku, Tokyo, Japan 102-8357

キーワード：英文学，学修成果，可視化

Key words : English literature, Learning outcomes, Visualization

### 抄録

ひと昔前，日本の大学の英語教育は原典講読（英文学作品を日本語に正確に訳す）によって行われてきた．ところが，英語を「聞いて話す」日常会話に重点が置かれなかったため，この教育方法は「大学を出てもろくに英語が話せないのではないか」と当時参議院議員であった平泉渉氏によって批判を浴びた．この教育方法の擁護に回ったのが上智大学英文科教授の渡部昇一氏で，彼は重要なのは「顕在性」ではなく「潜在性」で，目に見える効果は上がっていないが日本語と格闘する知的訓練を教えてくれたと述べている．この論争は二人の思惑に反して「実用」か「教養」かに簡略化され，平泉氏には企業そして中学・高校のPTA関係者が賛成にまわり，渡部氏には現職の英語教育関係者が応援にまわって，まさに平泉=渡部論争として日本をそして世界を巻き込んだ大論争に発展していった．

以来，日本の英語教育は「コミュニケーション力」に重点を置いた「実用」に定着して久しい．ところが2021年度からの入試改革では「センター試験」が「大学入試共通テスト」として学力の3要素「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度」を多面的・総合的に評価するものへと転換することが目指されている．「思考力」と「判断力」の見直しについては，国語において論述式の問題が課せられることからもいかに文科省が力を注いでいることが窺える．裏を返せば，「実用」に走って英語の「読み」をおろそかにしてきた付けが回ってきているのである．今の若者は自分の言葉で考えようとしないうえに，言葉の大切さを意識することもない．日本の古くからの英語教育，それは英語を正確な日本語に置き換えることによって言葉の大切さを認識する訓練であった．何故なら言葉が人間の思考を可能にする唯一の手段であるから．考えてみると日本の英語教育は数奇な運命をたどってきたことになる．英語を「読む」ことによって英語力を，そして正確な日本語を，最終的には思考力を培ってきたのである．

ところが，日本の大学における英文学系授業は今や敬遠され，そのコマ数も激減の一途をたどっている．授業で英文の訳読をするのを学生は一様に嫌がる．教員はそれに敏感に反応して大意を捉えることでお茶を濁し，学生に言葉の訓練をさせることを省略してしまった．それに拍車をかけるのが，英文学をやっても「役に立たない」という日本の企業を中心とした社会通念である．こうした議論は不思議とイギリスやヨーロッパの国々では起こらない．自国の文学を大事にしてきた国柄の違いなのかもしれない．オックスフォード大学英語コースのエマ・スミス教授にこのことを話すと，‘Very interesting!’という言葉が返ってきた．彼女の言葉には日本の風潮を肯定する意味はもちろん含まれてはいない．

オックスフォード大学のエマ・スミス教授とのインタビューでは大きな収穫を得ることができた．一つはオックスフォード大学の成績評価の方法である．試験問題の作成から，評価に到るまでの過

程の説明を聞くといかにオックスフォード大学が世界第一のレベルを維持しているのかが理解できた。さらに、入手困難な実際の試験問題の提供を受けていかに学生たちが高いレベルの評価基準をクリアしているのが確認できた。「単位の実質化」あるいは「学習成果の可視化」という言葉はもちろん日本の第三者評価においてのみ使われる言葉で、オックスフォード大学の成績評価にはそう行った類の言葉は存在しない。言葉として存在していないが、「単位の実質化」「学修成果の可視化」という言葉こそないが、それに相当する手段あるいはそれを担保する行為が遠い昔から行われ続けていることが確認できた。「顕在性」と「潜在性」という言葉で置き換えるのなら、「顕在性」は言うに及ばず「潜在性」をしっかりと持った学生をオックスフォード大学は育成しているのである。

## 1. 日本の英語教育の歩み

日本の大学における初期の英語教育は英文学作品の講読、すなわち英文を日本語に正確に訳すことによって行われてきた。しかし、日常のプラクティカルなコミュニケーションに重点が置かれなかったため、長い年月と時間を費やしながら大学の卒業者の外国語能力は「概して、実際における活用の域に達しなかった」と当時参議院議員であった平泉渉が批判を行い、上智大学教授であった渡部昇一がこの教育方法の擁護にまわって、あの有名な平泉=渡部論争に発展する。平泉の意に反して、この論争は「実用」か「教養」か、という論点に簡略化されて世間の大きな注目を集める結果となった。平泉の指摘が原因かどうか分からないが、この論争以降日本の英語教育は、文法重視の「読む」訓練からプラクティカルなコミュニケーション重視の方向へと着実に転換し始め、現在に至っている。

2020年から行われる大学入試改革で英語は大きな変革を求められることになる。TOEICあるいは英検といった外部資格試験を導入して、今まで顧みられなかったスピーキングの能力を重視しようとする動きである。ただ「話す」だけではなく、いかに論理的に自分の意見を相手に伝えられるかが鍵になる。今まで英語入試問題の花形であった読解の問題が消えて行こうとしている。気になるのは「読む」訓練が敬遠されて久しいが、この間着実に大学生のリーディングの力がTOEICのスコアを見ても落ちて来ている。「読む」ことなくして果たして論理的思考は可能なのだろうか。若者の文学離れが拍車をかけて、大学の授業から英文学系の科目が減り始め、教養課程の英語では文学作品を扱うことが

暗黙のうちに禁止されている。全ての大学生に英文学作品を読めとは言わないが、読む機会がなくなってしまうことは目に見えないものだけに、はるかに大きなものを失うことになることに気付いている人は少ない。一昔前、「読み」の訓練は英文学専門の教員が行っていた。渡部昇一が指摘したように、英語を読むということは日本語との「格闘」なのである。英語を正確な日本語に置き換えることによって言葉の大切さを認識するのである。何故なら言葉が人間の思考の手段であるから。

入試改革と並行して考えなければならないのは第三者評価である。本学も早々に第3クールに向けて準備を始めなければならない。今後の第三者評価でポイントとなるのは学修成果の可視化である。学修成果を定め、その達成に向けて授業内容・方法を工夫して実施する。学修成果が達成できたかどうか、どの程度達成できたのかを客観的な視点からチェックするためには数値化・計量化という「可視化」が必要になってくる。プラクティカルな英語であればそれこそTOEICテストのスコアを見れば一目瞭然である。ところが英文学教育となった場合、ことはそう簡単ではない。文学自体がそもそも曖昧なジャンルであって、例えばシェイクスピアの『マクベス』に関する理解の学修成果をどう定めるのか、またその達成状態をどう可視化できるのかは、かなり難しいというか曖昧になってくる。達成状況が曖昧なので、英文学教育自体が大学生にとって社会に出て行く上で役に立たないというのが現在の社会の風潮である。

## 2. オックスフォード大学の成績評価

戦略的個人研究費に採択されて、今回英国オックスフォード大学ハートフォード・カレッジ (Hertford College) English Course のエマ・スミス教授 (Professor Emma Smith) にインタビューすることができて貴重な資料の提供もお願いすることができた。この場をお借りしてスミス教授にはお礼を申し上げたい。彼女と文学の話をし、English Course の成績評価についての詳しい説明を聞いて、オックスフォード大学の「教育の質の保証」の高さにまさに驚愕してしまった。スミス教授は、オックスフォード大学は他の英国の大学に比べても成績評価に関しては「ユニーク」という言葉で表現していた。日本の大学とオックスフォード大学とでは、学生の数とその質を取ってもまさに取り巻く環境が違い過ぎる。安易な比較は無益であろうが、何かしら「英文学系授業における学修成果の可視化」について学ぶべきことがあったことも確かである。

スミス教授の説明によるとオックスフォード大学 English Course における具体的な成績評価は次の通りである。

- ①試験問題作成者と採点者は別の教員が行う。
- ②採点者は2名で、評価が異なった場合スタッフ・ミーティングに懸けられる。
- ③定期的に学外者が成績評価の妥当性をチェックし、問題があれば報告を行う。

私が一番驚いたのは、答案用紙には学生の本名は記入されておらず番号のみである。「甘い評価」が徹底的に排除されて、公平な評価が行われ、高い教育の質の保証がなされているのである。

本研究の目的には英文学教育が、あるいは英文学を専門とする教員が本学の英語教育に将来どう携わっていくべきかを検討することも付帯的目標としてある。「実用」を取って「教養」をおろそかにした弊害、具体的には衰え始めている英語の「読む」力を再度「英文学作品を読む」ことに立ち返って取り戻したいという思いがそこにあるからである。「読む」ことの大切さという視点からもう一度平泉=渡部論争の論点を整理してみたい。

## 3. 平泉=渡部論争の論点

1975年当時参議院議員であった平泉渉氏と上

智大学教授であった渡部昇一氏との間で戦われたこの英語教育に関する大論争は、当時日本の大学の英語教育が英文学の講読、すなわち正確に日本語に置き換える訳読に重きを置いていたため、中学から数えると10年間もの膨大な時間と労力を費やしながらか、いくら大学を出てもろくに外国人の前で英語が話せない、何ら「使える英語」が身につけていないことに業を煮やした平泉氏が、自民党政務調査会に「外国語教育の現状と改革の方向」と題する試案を提出し、当時の英語教育の擁護に廻った渡部氏がそれに対する反論として雑誌『諸君!』に「亡国の『英語教育改革試案』」を掲載したのが発端である。平泉氏には日本の企業そして中学・高校のPTA関係者が賛成にまわり、現職の英語教育関係者が渡部氏を応援して、まさに日本中をさらに世界を巻き込んだ一世を風靡した大論争となったのである。「論争はこうあるべき」として二人の努力は広く評価され、日本の英語教育にとっても掛け替えのない財産となった。

平泉=渡部論争の焦点は、簡略すれば「実用」か「教養」である。二人の論争で噛み合わなかった点はいくつかあるし、「実用」と「教養」とは言っても平泉氏が意味する「実用」と渡部氏が意味する「教養」とは意味が広く、時として双方の意味合いを含む場合もある。一概には言えない危険性もはらむが、これからの日本の英語教育のあり方を論じていく場合、やはり平泉氏は「実用」、渡部氏は「教養」を重視したと考えて良いだろう。

ここで平泉氏と渡部氏の経歴を参考までに述べる。平泉氏は1929年生まれで、東京大学法学部を卒業後フランスのグルノーブル大学などに学んで、各国外交官歴任の後、1965年参議院議員に当選。科学技術庁長官を務める。渡部氏は1930年生まれで、上智大学英文科、同修士課程卒。英国オックスフォード大学留学後、上智大学文学部教授に就任。二人の経歴で決定的に違うのは、平泉氏は政治家で渡部氏は教育者であることである。政治家である以上は、広く国民の利益を最優先にし、目に見える効果によって物事を判断する。かたや教育者は個々の学生の知識・学力を伸ばすことを最優先にし、「顕在性」よりも「潜在性」に重きを置いて教育を行う。二人の経歴の違いを考えてみると、平泉氏

が「実用」に渡部氏が「教養」の擁護に廻ることにはある程度必然的だったのかもしれない。

二人の論争の最大の焦点はそれまでの日本の英語教育が訳読中心に行われてきたことである。この研究の論点がずれないように渡部氏、平泉氏、そして二人の対談の司会を務めた鈴木氏のコメントを引用することにする。

日本人の外国語に対する関心は、聖徳太子の頃からすでに「原典を正確に読む」ということに向けられていたことであろう。太子が百済の言葉やシナの言葉をどのように話せたか、などと言うことを問題としている形跡がない。太子の先生は外国人だったのだから、太子も外国語を話されたのであろう。しかし太子の外国語教育において、いわゆる実用語学は目的とされない。太子が作られた私塾においてもそうである。学職頭になった鬼室集斯はその名前からして多分百済人であろうが、目的は要するに高い文化を持った隣国の書物を読むことに尽きる。  
〔『英語教育大論争, p. 26-27〕〕

渡部氏はさらに訳読の効用として次のような点を上げている。

この見地から見ると、平泉氏が「その成果は全くあがっていない」という戦前・戦後の外国語（英語）教育もそれほど捨てたものではないことが分かるであろう。少なくともそれは日本人に母国語と格闘することを教えたからである。単なる実用手段としての外国語教育は母国語との格闘にならない。その場合は多くが条件反射の次元で終わるからである。「格闘」という言葉はおだやかでないが、英文和訳や和文英訳や英文法はことごとく知力の極限まで使ってやる格闘技なのである。そしてふと気がついて見ると、外国語と格闘していると思ったら、日本語と格闘していたことに気付くのである。  
〔『英語教育大論争, p. 32-33〕〕

私も一大学教員の端くれであるし、長年英語教

育に携わり、学生時代は恩師の元についてまさにこのような日本語との格闘を英語の訳読において教わってきた。一時期実用的な英語に惹かれて E.S.S. という大学のサークルにも入って話す英語を目指してみたが、今から考えるとただたわいのないことをパクパク喋っていただけのことに思う。渡部教授は一般の人たちが気付かない、英語の訳読は日本語との格闘という、訳読を一生懸命にやってきた英語教員のみが知っている奥深さをいみじくも世の中に公表してくれたのである。英語の訳読は日本語の訓練であり、ひいてはそれは「言葉」の鍛錬でもある。言葉の鍛錬は、今の世の中にどれほど通用するのか、はたまたどれくらいの人々に理解してもらえるかわからないが、一言で言えばそれは哲学であり、道徳であり、宗教でもある。計り知れない潜在価値を持った修行なのである。そういった目に見えない価値を内在している英語教育が今では顧みられていないのが偽りのない現状である。

さて、二人の対談で司会役を務めた鈴木孝夫氏が次のようにこの訳読主義にコメントしている。

わたしが行司役としてここでつとめて第三者的立場にたって交通整理をしますと、渡部先生は、昔の旧制高校華やかなりし頃の、いわゆる読解主義といいますか、精神的な糧として古典を読むという方法を非常に高く買っておられる。これはわたしも、おそらく平泉先生も、その限りにおいては反対ではないと思うんですよ。ただ現在のように高等教育が大衆化した時代に、それだけを英語教育の柱としていいものかどうか。つまり過去の功績の認知以外に、現在もまた将来もそれでいいものかどうか。今まで渡部先生が書かれた二回の反論には、それについての発言がないわけですよ。わたしの見たところでは。

〔『英語教育大論争, p. 141〕〕

鈴木氏はこのようにレジャーランド化した日本の大学における訳読主義の英語教育の正当性に言及する当を得た発言をすると同時に、平泉氏

と渡部氏との論争において噛み合わなかった点をいみじくも次のように指摘している。

その一つは、これからの日本が、国際社会のなかで、分に応じた繁栄をしていくために、どのような語学教育が望ましいのかという点に関して、十分にかみ合った議論がなかった。

それからもう一つは、日本とアメリカだけが、国民の数に対して高等教育進学者がケタ違いに多いということからくる問題です。たとえば日本は高等教育機関が九百いくつある。アメリカは大学が二千いくつある。日本がたえず問題にするヨーロッパ諸国というのは、大学の数は百を切っているわけです。そうすると、日本の従来の大学教育は、ドイツの大学の理念と、アメリカの新制大学の形をないまぜにして、適当なところでお茶をにごして、国民の半分に近い人間が最高の教育機関に進む場合に、何をしたらいいのかという問題に、解決がつかない。そのしわ寄せを、英語教育だけが一身に受けているようで、精神修業にもなるし、実用にもなるし、選抜試験の手がかりにもなるし、授業効果の測定にもなる、ほかができないから英語がしょっているという形の、否定的な自己規定しかできていない。これは由々しい問題で、もうちょっと英語教育が本来あるべき場をわたしもふくめて多くの人が考えなければいけないということを、反省したという次第です。

(『英語教育大論争』, p. 165-166)

鈴木氏が40年前に指摘した、国際社会で日本がこれからどのような英語教育を行なっていくのか、国民の半数以上が大学に進学する現状においてどのような英語教育が本来あるべき姿なのかは現在に至るまでそのままの形で残っている課題である。

#### 4. 本学の英文学系授業の現状と問題点について

本学に勤めて30年近くになるが、採用された当時はイギリス文学を専門とされる著名な先生がたが多数おられた。シェイクスピアが専門の先生でも4人おられた時期がある。英文系32名の先生がたのうち19名の先生が文学系であった。その時期の授業はやはり訳読が中心で、まず英語が読めることが大事なことで教えられていた。作品の批評をする前にやはり原文を正確に読んでいなくてはならないというのが大前提となっていた。その読みの訓練の副産物として学生は言葉を大切にすることを学んでいたし、自分の言葉で考える大切さにも気付いていた。

ところが現在では英文系の先生がたで学部と短大合わせて17名の先生がたのうち文学を専門とされる先生は10名になってしまった。新学部のコミュニケーション文化学科あるいは比較文化学科においても英語を専門とされる先生がたはおられるが文学系はごく少ない。要するに英文学系の先生は訳読が華やかに行われる時期に比べて半数に減じたのである。それに呼応して英文学系の科目も激減し、短大英文科では過去に原典講読という科目が十数コマあったのが、現在では一つも残っていない。シラバスを概観しても純粋に英文学系の授業はほとんどない。ほとんどがイギリス「文学」からイギリス「文化」へと名前を変えている。学部の英文学科も来年度から名称を英語英文学科へと変更する。英文学系の授業が衰退して行っている証であろう。

いつ頃から訳読がされなくなったのであろうか。考えてみると18歳人口の減少で受験生が少なくなりそれに伴って学力が不十分な学生が入って来るようになってからではないかと思われる。訳読は高度な知的訓練を必要とするし、昔は難解な文学書を英語で読んでいたのが、それに付いて来られない学生が大半を占めるようになったからであろう。かくいう私もつい最近まで原書を訳読する授業が大半であったが、いくら丁寧に説明しても学生が理解できない、それよりも本を読むことすら興味を示さない学生が多くなって根負けしたというのが実情である。英語を読む力を付けて文学の世界に遊ぶ楽しさを味わうことがもう現代の若者に不可能ならば、言葉の訓練を省略して文学書の内容を噛み砕い

て説明し、学生が興味を示しそうなポイントに焦点を合わせて解説し、最後に視覚教材があるのならそれを見せて授業を終わるといふ甚だ不本意なものになっている。

それでは、逆にイギリスにおける日本語教育はどうなっているのか。オックスフォード大学の例を見てみたい。

## 5. オックスフォード大学ハートフォード・カレッジにおける日本語教育について

現在イギリスの大学で日本語教育がどのように行われているのか調査してみたい。オックスフォード大学のそれぞれのカレッジを横軸につなぎ合わせているのが、'Faculty of Oriental Studies'である。その中に 'Japanese Course' があって、Hertford College はオックスフォード大学でも一番多くの学生（とは言っても1学年4名）を受け入れており一人の 'Fellow'（特別研究員）を擁して日本語教育では実績のあるカレッジである。

「日本語コース」は4年制で2年次に1年間日本の神戸大学で研修を行うことが義務付けられている。4年を通じて学生は日本語の読む・書く・聞く・話すの4技能を少人数の語学教室で経験豊かな日本人によって身に付けさせられる。さらに、1年次では日本を中心とした東アジアの文化・歴史を学び、3・4年次においては日本語の「古文」を学び始め、近代・現代日本文学、日本語学、近代・現代の日本の歴史、人類学、政治、経済、芸術という幅広い分野から学生は自分のテーマを選んで専門性を深めていく。最終的に4年次に学生は15,000語の学位論文を書くことが義務付けられている。

次に上げるのが「日本語コース」の教育目標、いわゆるカリキュラム・ポリシーである。

The B.A. Honours course in Japanese at Oxford aims:

- to give students a thorough grounding in modern written and spoken Japanese, and in the written classical language;
- to ensure that they have a good general knowledge of Japanese civilization, culture, history and society; and

- to allow them to do in-depth, specialised study from a range of subjects, including both classical and modern literature, linguistics, pre-modern and modern history, anthropology, politics, economics, and art.

(<http://www.orinst.ox.ac.uk/undergraduate/handbook/japanese.html>)

これを見ると柱は3つあって、日本語の読み・書き・話す・聞くの習得、日本の文化・歴史・社会に関する知識の修得、そして学位論文のテーマとして学生は日本の文学・語学・歴史・人類学・政治・経済・芸術の専門分野からテーマを選ぶことになる。これがいわゆる「学修成果」となる。

具体的に1年次に行われる Modern Japanese I・Modern English II と East Asia Survey: Japan がどのような授業なのかを見てみたい。Modern Japanese I・Modern English II とも日本語の読み・書きに重点を置いた授業で一週間に10時間年間を通して行われる。East Asia Survey: Japan は日本を中心とした東アジアの歴史に関する講義が最初の学期に行われ、後半の2学期間は日本の近代・現代の歴史を中心に講義が行われる。いずれの科目も学年末に筆記試験と論文提出によって成績の評価が行われる。興味ある事実は、日本語の読み・書きに初年度から授業の重点が置かれていて、聞く・話すの日本語の習得に関しては最終の4年時のみに評価が行われていることである。これは日本における英語教育が「話す」よりも「読み」を中心に行われてきたことと共通する。「読み」が「話す」ことよりも知的訓練になっていることをイギリス人も認識しているのである。

次に3・4年次の文学教育の詳細を見てみたい。選択科目の Core Special Subject Options に挙げられているのが Classical Japanese Literature, Japanese Linguistics, Modern Japanese Literature の3つである。中心的な科目として古典日本文学と現代日本文学という「文学」に力点を置いていることは注目すべきであろう。さらに3年次から必修として日本語のいわゆる「古文」の読みを行うことは日本の昔の英語教育と共通していて、さらに興味深い。さて、この3つのコア科目の中から学生は1つ選択するわけであるが、例えば Modern Japanese

Literature を選択した場合、下位の Other Special Subject Options として Topics in Modern Japanese Literature を、Special Text Options として Modern Literature I および Modern Literature II を選択することになる。日本の英語教育が Chaucer の原典講読から始まったように、Hertford College における日本語教育は Special Text Options において『源氏物語』の原典講読から始まっているのである。

「日本語コース」には14名の教員がオックスフォード大学に配置されている。各々がそれぞれのカレッジに所属しているが、例えば Hertford College に所属しているのは日本語語学を専門としている Professor Bjark Frellesvig である。日本語の語学教育には4名の日本人の教員が携わっているが特筆すべきことは、彼女らは全て「博士」とか「教授」の称号を持たないのである。日本の大学で一般教養として「英語」を教える教員は、日本人の場合どこかの他の大学に所属している教員か、ネイティブにしても少なからず大学に所属している「称号」を持つ教員である。オックスフォード大学の日本語の読み・書き・聞く・話すの訓練に携わっているのは日本で言えば、いわゆる英会話学校の先生になる。

オックスフォード大学で日本文学を専門とする教員は日本語教育、特に「読み」の訓練に携わってはいない。これは日本の大学において英語教育が英文学を専門とする教員によって文学書を深く正確に「読む」ことに力点が置かれたことと異なる。それでは、日本における深い「読み」の訓練に匹敵するような科目がオックスフォード大学にあるかと言えば、それはない。日常的なコミュニケーションという意味での「読み」であれば、それはコア科目の Japanese Linguistics になる。この科目においては、敬語、性別の違いによる言葉、方言、外来語そして日本語の統語論を学ぶ。学生は基本的にはこの科目によって日本語の構造や語彙を把握し、Modern Japanese において実際の語学の運用の訓練を行うのである。日本の英語教育のような「深い正確な」読みを行なって、日本語に訳する過程で「日本語」を再確認するという作業は行われていないのである。日本の英語教育が原典購読によって正確な読みを行なったのはまさに奇異な例なのである。

ちなみに Hertford College の日本語コースを卒業した Amy さんの受講科目を次にあげる。

1. Modern Japanese I
2. Modern Japanese II
3. Spoken Japanese (1/2 paper)
4. Classical Japanese
5. Special text option I (The tale of Genji and the Pillow Book)
6. Special subject option (Classical Japanese Literature)
7. Dissertation (“Peasant Rebellions and the Tokugawa Judicial System”)
8. Special text option II Warrior Tales (Heike Monogatari)
9. Special subject option II Pre-modern Japanese History (1185-1853)
10. Special Text option III (Pre-modern Japanese History Text)

彼女は「百姓一揆」を学位論文のテーマにしたが、いかに文学系の科目を多く履修していることがわかる。つまりオックスフォード大学での日本語教育は深い正確な日本文学の読みによって英語の大切さを捉え直すという作業は行っていないのである。ただ、特筆すべき点は厳然として選択科目ではありながらも「文学」の大切さを認識しているところが日本と違うところである。私たちが、昔学生の頃チャーサーの『カンタベリー物語』やミルトンの『失樂園』を読んだように、Amy さんは現在でも『源氏物語』『枕草子』『平家物語』を読んでいるのである。

## 6. オックスフォード大学 English Language and Literature における授業内容と試験問題について

オックスフォード大学のホームページを開くと英文科 (English Language and Literature) の教育内容が以下のように示されている。日本の大学のように教育目標や授業内容が細かくシラバスに示されているわけではなく、あくまでも大雑把に記述されている。

Although details of practice vary from college to college, most students will have one or two tutorials and classes each week. A tutorial

usually involves discussion of an essay, which you have produced based on your own reading and research that week. You will normally be expected to produce between eight and twelve pieces of written work each term.

Most students also attend three or four lectures each week.

To find out more about how our teaching year is structured, visit our [Academic Year](#) page.

### 1<sup>st</sup> year Course

Four papers are taken:

- Introduction to English Language and Literature
- Early medieval literature 650 – 1350
- Literature in English 1830 – 1910
- Literature in English 1910 – present day

### Assessment

Three written papers form the First University Examination, together with a submitted portfolio of two essays for Introduction to English Language and Literature.

All exams must be passed, but marks do not count towards the final degree.

(<https://www.ox.ac.uk/admissions/undergraduate/courses-listing/english-language-and-literature?wssl=1>)

1年生の場合の例であるが、1週間に1つか2つのチュートリアルがあって、その週に読んだ本と調査した結果をまとめたレポートに関して教員と議論がなされる。それぞれの学期で8本から12本のレポートを書くことになっている。また週3つか4つの講義に出なければいけない。日本の大学と大きく違うのは出席しなければいけない科目数がかなり少ないことである。それぞれの学期には2回 Reading Week があって授業はなく学生は読まなければいけない本をせせと読むのである。本を読んで考えて調べるといふ、いわば大学生本来そうあるべき当然のことは行っている。日本では文科省の指導で前期15回、後期15回の授業を確保しなければならず祝日に授業を行わなければいけない状況である。日本の大学生は学校で数多く

の授業を受ける代わりに、自分で本を読んで考える時間が極端に少なくなってきている。

1年次に提出しなければいけない論文4つのうち3つは英文学関係（古典文学、近代文学、そして現代文学）で必修となっている。本学の学部英文学科は来年度から英語英文学科に名称を変更するが、これほど文学を初年度から徹底的に教えることはしない。いかにオックスフォード大学では自国の文学を大切に考えていることが窺える。次に示すのがエマ・スミス教授から実際にいただいた試験問題である。2016年の Trinity Term 6月16日火曜日に 14:30～17:30 まで3時間で行われた Literature in English (1830–1910) の試験である。学生は1～21までの設問の中から3つテーマを選んでエッセイを書かなければいけない。具体例を一つだけあげる。

“‘Things flow about so here!’”, she said at last in a plaintive tone, after she had spent a minute or so in vainly pursuing a bright thing, that looked sometimes like a doll and sometimes like a work-box, and was always in the shelf next above the one she was looking at’ (LEWIS CARROL, *Through the Looking-Glass and What Alice Found There*).

このテーマに関してエッセイを書く場合、『鏡の国のアリス』『不思議の国のアリス』は言うに及ばず、作品に関する参考文献、作者ドジソンにまつわる資料、あるいは当時の文化・社会を記述した文献を読んでいなくてはいけない。大学1年生にしてはかなり高度な、というよりは日本では研究者なみのレベルの高さである。

## 7. 英文学系授業における学修成果の可視化について

結論として言えることは、英文学系授業における学修成果の可視化はかなりむずかしいことである。「むずかしい」と言うよりは、理数系科目あるいは実用系の英語科目と違って、設定してもかなり曖昧なものになってしまう可能性が大である。文学というものが「曖昧性」の上に成り立っているからである。ここで誤解を生じてはいけないのははっきりさせておくが、曖昧性はこの場



合ポジティブな意味である。消して否定的な意味で使っているわけではない。曖昧性を土台としている学問領域において学修成果の数値化は到底無理な話である。たとえば、『マクベス』の学修成果の一つを「参考文献を読んで十分な批評ができる」と設定した場合、読むべき参考文献の数値化は可能であるが、「十分な批評ができる」の数値化は不可能である。それは実際に教員が学生とのインタビューで時間をかけて、いろいろな方面から議論して初めて評価が可能になる。

オックスフォード大学の成績評価が「単位の実質化」を十分に行っていることはすでに説明した。

「単位の実質化」という言葉は、勿論日本だけの、それも大学の第三者評価に用いられる専門用語である。オックスフォード大学の教育内容、授業スケジュール、成績評価の方法を見てもそれに相当する用語はない。ましてや「学修成果の可視化」という用語もない。数値化による可視化を行わなくても十分にそれに相当する、それを担保する行

いが長い年月「歴史」として厳に行われてきたのである。イギリスの大学の数は日本より少ない、入ってくる学生のレベルが極端に高い、教員一人当たり平均して担当する学生数が極端に少ない、などもろもろ、教育環境を取り巻く要因がイギリスと日本では違いすぎる。学修成果の可視化を行わなくても十分学生のレベルは維持されているのである。それでは、本研究を行ったことが無意味なのかということもそうでもない。いろいろ参考文献を読んだり、エマ・スミス教授と話をしたり情報を提供したりしてもらった結果、日本の大学の英語教育のために一つ提案が思い付いたのである。それは「英文学」を選択科目として小規模でもいいから復活させたらどうかということである。大学生全てに英語の「読みの訓練」を行えというのではない。少人数でもいいから英文学作品を読んで、言葉を学ぶ大切さを学ばせたらどうかというのが私の本研究を行って得た結論である。

(受付日：2018年5月23日，受理日：2018年6月1日)

### 武藤 哲郎 (むとう てつろう)

現職：大妻女子大学短期大学部英文科教授

筑波大学大学院修士課程教育研究科英語教育コース修了。

専門はイギリス文学。現在は Ian McEwan について研究を行っている。

主な著書：1990年代のイギリス小説 1999 (共著，金星堂)

主な論文：イアン・マキューアンの最新小説 *Nutshell*---胎内にとじ込められたハムレット、大妻女子大学紀要-文系-。2018, (50), p. 13-21.